



私達の地球を少し冷やそう

第56回

シカなどを「管理」する法改正 肉や革の有効利用が急がれる

財団法人 地球・人間環境フォーラム専務理事 **平野 喬**

日本列島にシカ、イノシシ、サルなどの野生動物が増えすぎてしまい、農業、林業、一般の人々の生活にも被害を与えていることは、この欄でも何度かお伝えしました。大型の哺乳動物が日本のようにたくさん生息している先進国はないと言われますので、喜んでいいことかもしれません。野生動物自身の生存や他の生物の多様性にまで悪影響を与える増え方となると、コントロールするのは必要かもしれません。

環境省は今春、「鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律（鳥獣保護法）の改正案を国会に提出し、可決、成立しました。法律の名前も「鳥獣の保護及び管理並びに狩猟の適正化に関する法律」と改められました。新しい法律には鳥獣の「管理」という言葉が加わりました。「管理」とは、鳥獣の生息地を適正な水準に減少させ、またはその生息地を適正な範囲に縮小させること、とされており、鳥獣を保護することから、増えすぎた鳥獣を減らすことも法律の目的に加えられたこととなります。

これに伴い、都道府県知事が策定する鳥獣保護計画に、鳥獣を減らすための管理計画が追加されることとなります。法改正によって具体的にはどんなことが変わるのでしょうか。鳥獣捕獲の規制が緩和され、環境大臣が指定した鳥獣は、日の出から日没までと限られていた猟銃の使用が夜間でも使えるようになることや、

都道府県知事の許可を受けると住居集合地域でも麻酔銃が使えるようになります。網やわなを使う狩猟免許の取得年齢は、20歳以上が18歳以上に引き下げられます。また、猟師の高齢化が進み、猟師の人数も減少していることが、イノシシやシカの増加に拍車をかけていることから、認定鳥獣捕獲等事業者制度を導入し、若者や女性が猟師になり易くなる試みもスタートします。

猟師目指す若い女性増える

猟師になるための講習会などを続けているNPO法人、日本エコツーリズムセンターによると、猟師を目指す若い女性の参加が増えているそうです。若者の間で自然志向の高まりや、野生のシカ肉は、化学物質に汚染されている心配が少なく、何より低脂肪、高タンパク、赤身の鉄分の多い肉が美容と健康に良いと評判だそうです。

今回の法改正で、シカやイノシシがたくさん処分、つまり殺されてしまいます。動物の命を奪う以上、一つの無駄もなく利用させていたかどうかと、MATTAGI（マタギ）プロジェクト実行委員会という活動がスタートし、私どもの財団が事務局としてお手伝いすることになりました。前述のようにイノシシやシカの肉は、ジビエ料理として様々に利用され、人々の生業につながる可能性が出てきています。しかし、皮に関しては大半が捨てられ、焼却処分されていますので、皮の利用で



イノシシやシカの皮も、高級感のある皮革製品に変身（山口産業提供）▶

ている皮革製品です。同島は江戸時代、イノシシが増えて農民を苦しめていたが、藩の郡奉行であった陶山訥庵（すやま・とつあん）がイノシシを退治して、農業を立て直したという歴史があります。同市には、有害獣ビジネスコーディネーターという職員がおり、皮の安定調達、革の製品化などに取り組んでいます。

墨田区内で75年も皮のなめし業を続けている山口産業という会社が、各地で獲れた野生動物の皮を格安でなめし、産地に送り返して商品化を進め、地域活性化を支援している話を当欄の52回で紹介しました。革のまちすみだの復活と地方経済の活性化、付加価値の高い皮革製品のブランド化によるビジネスチャンスの拡大等々、このプロジェクトが成功すれば、イノシシやシカが貴重な自然資源として見直される日が来るかもしれません。

地域興しを進めようというのがこのプロジェクトの狙いです。先行例として注目されているのは、長崎県対馬市で「TOTSUNAN」というブランド名で売られ

一般財団法人 地球・人間環境フォーラム
環境問題に取り組む公益法人。地球環境問題の科学的調査研究を目的に1990年に設立。
国立環境研究所・地球環境研究センターの研究サポート、研究成果の普及・啓発などのほか、月刊機関誌「グローバルネット」を発行。